

3-1編集企画体制への道(2)

出版事業②「大型本」を作る②清山哲郎先生との出会い(上) 代表取締役 吉田 隆

25年間の出版人生の中で、数多くの監修、編集依頼の手紙を記した。中でも、20年前に出した一通の手紙のことは今もよく覚えている。昭和58年夏、日経産業新聞朝刊一面に同年9月福岡で化学センサの国際会議が行われること、その組織委員長が九州大学清山哲郎教授であることを伝える囲み記事が掲載された。その記事にピンとくるものがあった。昭和53年11月、私のフジテク入社と同時に発行された「センサ実用便覧」(監修◇OHT技術士事務所大森豊明博士)はその後5年間、記録的な売れ行きを見せていた。本書は物理センサを中心にセンサ全般を体系的にまとめた書籍である。それならば「化学センサ」を体系的にまとめてはどうかと考えた。すぐに先生に手紙を出した。会社や自己紹介に始まり、センサ本の評判や国際会議への関心を述べ、化学センサを体系化した本を作りたいこと、その本の監修をお願いしたい旨などを記した。ワープロがない時代である。一生懸命書いた手紙は、会社の便箋で十数枚に上った。音沙汰もなく二週間ほどがすぎ、あきらめかけたころ返事が届いた。「汚い字でまいりました」という辛口のことばで始まる手紙の主旨は、「言いたいことは分かった。基本的に引き受けるがその前に一度会おう」というものだった。

●「化学センサ実用便覧」

清山先生に初めてお会いした昭和58年10月には私の独立が決まっていた。私は新刊書籍の企画編集と進行管理だけを担当し、発行元はフジテクとなった。編集会議での先生は大変厳しかった。私が進行にもたつたびに、その場で「ちゃんとしなさい!」と何度も雷をもらった。会議後、本郷「華城」で食事中的ことである。(故)荒井弘通・九州大学助教授(当時)が、「清山先生はよく監修を受けてくれたねえ!あまり受けない方だよ!」と驚きの表情を見せられた。そして声をひそめ「先

生は怖いけど、素顔は優しい方だ」と、会議で叱咤された私を慰めるように話された。その言葉通り、本の編集が進むにつれ、清山先生が並み居るお弟子さんたちに厳しさで怖れられるだけでなく、敬愛をも集める大先生であることが分かってきた。「化学センサ実用便覧」は昭和61年4月に完成し、フジテクのヒット商品となった。

●「日本表面科学会」から「日本工学アカデミー」まで

その1年ほど前、NTS設立の昭和60年夏、先生が設立発起人を務められた日本表面科学会(昭和54年設立)の10周年記念誌の刊行にチャレンジしないかという、設立間もない会社にとって願ってもない話をいただいた。新会社をバックアップしようという先生なりのお心遣いだったと思う。学会記念誌を無名の出版社に任せることは、先生としてもリスクであったはずだ。私はその期待に応えたいと編集に取組んだ。日本表面科学会10周年記念誌「表面科学の基礎と応用」は5年後の平成3年に完成した。本書は、フジテクとの共同出版で初版3千部を完売する大ヒットとなったのみならず、NTSが顧客データベース構築に一步踏み出すきっかけとなる重要な書籍となった。本書の発刊前年の平成2年には、学会誌「表面科学」の編集の話をお願いされた。この仕事は、結果的に失敗に終わったが、急遽、編集担当スタッフを一名募集した。そのスタッフが、現編集企画部長○○○○○だった。又、平成3~4年にかけて、日本工学アカデミー地球環境専門部会の事務局を1年ほどお手伝いした。「事業にはならんが勉強だと思って取り組むといい」と勧められた。日本の科学技術分野で指導的立場にある研究委員が集まる専門部会には、私、○○、○○の3名が出席した。当時、渦中の地球サミット関連のハイレベルの議論を通し、環境という時代を先取りする視点を身につける貴重な経験だった。

●芸術と科学

先生は昭和59年4月の九州大学ご退官後は、学者の枠を超えるスケールの大きな構想力で、21世紀の福岡、九州地域の産業技術振興のグランドデザインを提唱され続けた。常に、東アジア地域の中の福岡、九州という視点を忘れず、又、科学技術振興に果たす芸術や文化の役割にも深い理解を持たれていたと思う。ある日、先生のご自宅に何うと美しいガラス器が目にとまった。「ガレですね!」と言うと、「さすが芸工大出身!」と嬉しそうにその器の由来を説明された。芸術同様、地域振興の手段としてのイベント事業にも理解を持たれていた。昭和63年、東京大学の坂村健教授の協力を得て取組んだ「TRON電腦ファッションショー」に話題が及んだところ、電腦よりもファッションショーの方に興味を示された。そして「アジアファッションショー」を企画してみないか?と勧められた。おりしも福岡ではアジア太平洋博覧会の開催を間近に控えていた。その催しの一つとして、ASIAN各国の交流に活用してはどうかという発想である。残念ながら、実現には至らなかったが、先生のそうした柔軟な発想力の源は、専門領域を超えた幅広い人々との交流の賜物なのだろう。私としても、出版事業とは別個に自己流で進めていたイベント事業に、清山先生の理解を得たことは精神的な支えとなるだけでなく、表現の場が紙と空間の違いはあるものの、二つの事業が共に企画・構想力を競うビジネスとして、両立することも学ぶことができた。



●編集後記

人体には、いろいろなところにつぼがある。神経もいろいろなところに通っている。個人差によってその密度はあるのだろうか? インタビューでお世話になった瀬戸山氏「僕は運動は好きですが、神経が切れてまして…」きっと神経はその頭脳に集中しているのだから。私の愛する天才ジョッキーY.T氏、彼は手綱を取るその両腕に。じゃあ、私は?口か……(あした)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

NTSニュース

2003年11月号(通巻57号)
2003年10月25日発行